九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 獨逸的なるもの

千代, 正一郎

https://doi.org/10.15017/2556557

出版情報：文學研究. 33, pp.191-196, 1943-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 獨逸的なるもの

千代正一郎

獨逸人の特質が何であるかといふことは獨逸に關心をもつ者にとつて最も興味ある問題の一つであらう。實際この問題については古くはタチツスの『ゲルマーニア』以來現在にいたるまで數へきれないほど多くの人々が種種なる立場から樣々の說明を試みてゐるので、それらを紹介するだけでも隨分大きな仕事であつて、かかる小文のよくするところではない。しかしこの問題は私が九大獨文科の學生であつたころ恩師小牧教授ならびに當時助教授たりし佐藤通次先生の御指導のもとにクライストやラーベの研究をはじめてこのかた絕えず私の心をとらへてゐるものであるから、小牧先生の還曆記念號に一文をもとめられたこの機會に、日頃これについて私が考へてゐることをつたないながらもここに書きしるして、先生の御批判をあふぎたいと思ふ。ただ許された紙數に限りがあるので、獨逸人の數多き特質のうち最も重要と思はれる三つ、すなはち徹底性、二元性および發展性（または超越性）をとりあげ、それらが獨逸文學にいかにあらはれてゐるかを考察するにとどめ、そのほかの問題は他の機會にゆづることにしよう。

なにごとに限らず極端まで徹底的におしすすめるのは獨逸人の行動、思索、感情のすべてに通ずる大きな特色であつて、全く驚歎に値するものをもつてゐる。佛蘭西

の自然主義が獨逸に入つたとき、「藝術は作家のテンペラメントを通して見た自然の一片である」といふゾラの主張をホルツは徹底させて「藝術は再び自然たらんとする傾向を有す」と訂正し、友人シュラーフと共同で『ハムレット親爺』Papa Hamlet(1889)なる短篇集を發表した。そのうちの一篇『死』は決鬪のため瀕死の重態に陷つた大學生の臨終を非常に細密に描寫して、いはゆる徹底自然主義の技巧を遺憾なく發揮した傑作である。ゾラの自然主義が獨逸に入れば徹底自然主義にまで發展するといふこの事實こそ、獨逸人の徹底性を最も雄辯に物語るものではなからうか。「すべてか、しからざれば無」alles oder nichts といふ言葉も獨逸人のこの性質をよくあらはしてゐる。この言葉の權化ともいふべき詩人はクライストである。讀者を壓倒せずにはおかない彼の作品の魔力も、その悲劇的生涯も、ナポレオンに對する飽くなき憎惡も妥協を知らぬ一本調子な彼の性格をぬきにしては全然理解できないものである。

獨逸人は一般に思索癖が強いといはれてゐるが、これも結局徹底的に考へぬかうとする性質のあらはれにほかならない。獨逸文學に哲學的色彩が濃厚なることは萬人の認むるところであつて、獨逸の詩人は殆どすべてが同時に思想家であるといつても過言ではない。これが獨逸文學を何となく重苦しく近づき難きものと感ぜしめる所以でもある。この傾向は或る場合にはいはゆる Grübelei となつて詩人ならびに作品にわざはひしてゐないでもないが、他方においてゲーテの『ファウスト』をはじめとして思想的に深遠なる內容を表現せる幾多のすぐれた文學を生みだした事實を忘れてはならない。

獨逸文獻學ないし文藝學のあの驚異的發達も獨逸人のこの性質なしには全く考へられない。われわれが獨逸文獻學に接してまづ壓倒されるのは詩人の作品その他研究に必要な資料の蒐集のゆきとどいてゐることである。百

四十三冊から成るいはゆるヴイマル版のゲーテ全集の如きはその徹底せるものである。但しかうなるとあまり完全すぎてもてあますといふ感がないでもない。そのほか索引、文藝辭典、年表、地圖などいたれりつくせりで實に便利にできてゐる。最近は日本の文藝學も著しい發達を見せてはゐるが、獨逸に學ぶべき點がまだまだ相當あるのではないだらうか。これは單に文學に限られた問題ではない。われわれは獨逸の學術の底に流れてゐるこの徹底性を見落してはならない。

世界を二元的に觀るのは西歐思想に共通の現象ではあるが、獨逸人にはこの傾向が特に强く認められる。肉體と精神、現實と理想、個人と社會、悟性と感情などの矛盾對立に絶えず惱んでゐるのが獨逸人である。屢〻引用されるファウストの「ああわが胸には二つのたましひ宿る」といふ句はこの二元性を詩的に表現したものにほかならない。かやうに一人の人間のうちに二つのたましひが徹底的なはげしさをもつてたたかつてゐるところに獨逸的二元性の特色が存する。このたましひの葛藤を表現するに最も適した文學形式は劇文學なかんづく悲劇であるがゆゑに、獨逸文學において悲劇が質的にも量的にも斷然すぐれてゐるといふのはさもあるべきことである。又獨逸浪漫派の詩人が好んでとりあげる Doppelgänger のモティーフも自我の二元的分裂の擬人化にほかならない。獨逸文化を對立する樣式、たとへば素朴的と情感的（シラー）、アポロ的とディオニュゾス的（ニーチェ）、ルネッサンスとバロック（ヴェルフリーン）、古典的と浪漫的（フリッツ・シュトリッヒ）などをもつて說明せんとする多くの試みも獨逸人の二元性を類型として把握したものである。

二つのたましひの矛盾對立に惱んでゐるのが獨逸人の宿命的現實の姿であるとすれば、この二元性をいかにして克服するかといふことが彼らのすべてに課せられた問題であり、彼らの努力の目標である。しかも獨逸人の徹

底性は中途半端の妥協を許さぬがゆゑに、そのたたかひはいよいよ深刻となる。さうしてこの苦闘の結果として生れてきたものが否定の否定としての超越を契機とする辯證法的發展の立場であり、かかる克服の過程を最もよくわれわれに示してくれるのが人間ゲーテの一生である。浪漫派のイロニーにおける自己否定、自己超越の思想も辯證法的發展の立場を特殊な言葉で表現したものにほかならない。たゞこの場合には見るわれが見られるわれに對してどこまでも高次的であるといふ超越性ないし否定の契機が强調されてゐるだけのことである。

このイロニーと聯關して考へられるのは獨逸文學におけるフモールの立場である。もちろん私がここにフモールといつてゐるものは日本のユーモアといふ言葉が意味するやうな淺薄な笑ではなくして、人生や世界に對する深い洞察を前提とする一つの人生態度としての笑である。笑の本質については種々なる說明がなされるであらうが、笑の最も重要なる契機として超越性をあげることができよう。われわれが矛盾對立にみちた現實に卽して觀る限り、人生はどこまでも悲劇である。しかしわれわれが對等の立場を揚棄して超越の立場に立つとき、そこにはじめてゆとりが生じ、笑が可能となる。しかうして超越の立場は神の立場にほかならない。この意味において人生態度としてのフモールは神の立場に立つことである。神の立場はまた愛すなはちアガーペの立場でもある。獨逸文學において最も高いフモールの立場に到達せるラーベの作品を讀む者がそこからあたたかい慰藉を汲みとることができるのは彼のフモールが深い愛によつて裏づけられてゐるからである。人間の眼から見れば世界は悲劇であるが、神の眼から見れば世界は喜劇となる。しかし人間が神の立場に立つといふことはみづからを神と思ふことではない。みづからを神と思ふ者があるとすれば、それはひとりよがりにすぎない。獨斷論はわれわれの精神

が疲勞して絶對の休息に入つたことを示すものである。フモールはみづからをフモールの對象となすことによつて辯證法的發展をなすべき無限の任務を課せられてゐるのである。

しからばかかる精神の辯證法的發展を表現するに最も適した文學形式は何であるか。それはRomanなかんづく Bildungsroman（教養小說）である。この教養小說は主人公のたましひの發展の過程を描いた小說といふ意味で Entwicklungsroman（發展小說）とも呼ばれてゐる。近世獨逸の小說家は殆ど皆といつてよい位この文學形式を試みてゐるのであつて、ゲーテの『マイステル』をはじめとしてノヴーリスの『オフテルディンゲン』、ケラーの『綠のハインリッヒ』、ラーベの『フンゲルパストル』など幾多の傑作が生みだされた。中世におけるヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチファル』もこの意味において教養小說の代表作と見ることができよう。かやうに獨逸小說界において教養小說すなはち發展小說といふ形式が他國に見られない顯著なる發達をとげたといふことは獨逸人の發展性と密接な關聯を有するものと考へねばならない。

從來獨逸人の特質を論ずる場合その現實面たる二元性を強調するあまり理想面たる發展性または超越性がそれほど重く見られなかつた傾きがあるが、獨逸人の偉大さはむしろその二元性を克服せんと努力する發展性に存するのではなからうか。對立する類型概念をもつて獨逸人を分類せんとする試みが、立論のはなやかさにもかかはらず、われわれを心から納得させることができないのは發展性を無視して固定した類型にはめこまうとするところに無理があるからであらう。われわれが獨逸文學史を仔細に檢討すればするだけ、古典主義にしろ、浪漫主義にしろ、詩的寫實主義にしろ、皆それぞれの立場において綜合を求めんとする努力であつたことを知るのである。

かく觀じきたるときヴォルフラムの『パルチファル』やゲーテの『ファウスト』が最も獨逸的なる人間といはれる所以もおのづから明らかとなるであらう。

（昭和十八年五月二十八日）